発行所
津奈木公民館
芦北郡津奈木町
電話(78)3111(代)
印刷所　旭印刷
電話(水俣)(63)4101番

津奈木

合格祈願 もちつき大会

津奈木中3年　中山　大作

田植え、稲刈り、そして収穫とみんなで汗を流し頑張って取りあげたもち米で先日、もちつき大会を行いました。

これらの作業は、殆どみんなが初めて経験することで、指導していただいた保護者の方々や貸地主さんには深く感謝しています。

特に、もちつき大会では終日寒い中、その準備をしていただいて大変だったろうと思います。

最初はうまくいかなかったが、時間がたつにつれて願いを込めてもちをつきました。きっと各自の志望校へ合格することができることでしょう。

あとは、受験勉強を頑張るだけです。

一言

人間何か心配で気になることが必ずあるものである。個人、社会、大きくは環境問題、政治等、数えればきりがない。しかし解決できる方法がある場合はよいとして、お先き真暗で、個人ではどうしようもない事柄が山程ある。現に「一言」の原稿依頼も気になったが、これは本人の努力で解決できる。そこで個人ではどうにもならないが、気になって仕方のない事柄を二、三考えて見ることにした。

一、「小産小死」高齢者増と、若い力減少で経済の落ち込み、社会活力の衰退等、福祉問題にも影響して、このままでは「日本丸」は転覆するかもと心配している。

二、代理母、未婚の母、独身生活肯定・賛美論者増等、小産にも関係があるが、苦痛を逃避し、快楽を求める者が増加していること。

三、日本には中近東、東南アジア等からの移住、出稼ぎ者増により犯罪増加も心配だが、日本女性のイスラム系男性との結婚等、国際結婚が増えつつあるし、単一民族と言っていた日本が、多民族時代になる。美しい日本語がチャンポン語になりつつある。頂点に立った者は必ず衰退するのが世の常で、日本も何時かはあわれな国に落ちぶれるのではと、いらぬ心配をしている今日此頃である。(山下記)

第44回熊日三太郎甘夏駅伝大会

(津奈木　大健闘)

一般四位　総合二位

水俣市役所前をスタートした選手団

去る一月九日(日)熊日三太郎甘夏駅伝大会が開催され、水俣市役所をスタート、湯ノ児海岸道路を回り、旧津奈木太郎峠を越え、湯浦から芦北町の旧国道を抜け、旧佐敷太郎を越えて、田浦町農村環境改善センター前をゴールとする(一般・高校生が五区間、中学生十区間)四十一キロのコースを、一般十一チーム、高校生五チーム、中学生六チーム合計二十二チームの参加で熱戦が展開された。

津奈木町チームも昨年九月下旬から"優勝"を目標に、練習に励んできた。

さぁー、本番の朝午前八時B&G海洋センター前に集合し、出発式を行い、町長の激励のことばに励まされ大会に臨んだ。

市役所前を10時にスタート。選手達は、地元の声援を受けて力走を続けた。Aチームは、四位、Bチームは八位、総合二位と昨年の順位を守った。

中学生は、芦北Aが優勝、芦北Bが4位と健闘した。

ご存じのとおり本町は、一市三町で一番人口の少ない町で、総合二位の成績は総合優勝の価値があると思う。

なお、「十年連続出場功労者」として、倉野義彦選手が表彰された。

最後になったが、各選手の健闘をたたえ、ご苦労に対し感謝申し上げたい。

一般の部(監督、浜本繁巳)
宮嶋弘行、倉野義彦、松永進、斉藤拓己、福田必、田口伸二、諫山幸多郎、川野又男、藤原審二、竹本昌広

中学生の部(監督、田原正和)
福山善久、柳迫光、鶴野哲史、斉藤三平、濱本寛代、吉野明日香、宮田有紀、竹田香織

子育てで大事なこと

二月二十日、津奈木町家庭教育学級講演会が文化センターで開かれた。講師は慈愛園園長の潮谷愛一先生。「思春期の心」と題しての子育ての話に、出席した百十余名の保護者が熱心に耳を傾けた。

講演では乳児期における日米の子育ての違いを挙げて、添い寝、授乳、おんぶやだっこの重要性を強調された。人見知りをする事が母親への愛の表現との事である。

また、遊び体験によって幼児期での仲間への愛が芽生えるそうである。

これらの乳幼児期での体験の有無が思春期に成長した子どもの心の安らぎになるか、不安として残るかの分岐ということだった。つまり、心の安らぎを持った子どもだけが意欲をもって成長を続けていけるということである。

また、思春期に問題行動を起こす子どもに対する接し方として、「心から愛しているということをくり返し伝えること」と語っておられる。子どもの問題行動の根底には、「不安」が常に伴い、家庭が安心の港になっていないと指摘される。親として「安心」の心を持たせるための声かけが大切という訳である。

今後は更に難しい子育ての時代の到来が予想される。この度の講演は子育てに悩みを持つ私達にとって、大きな示唆を与えていただいた気がする。

もっと小さい子どもを持っておられる保護者の方々に聞いていただきたかったと感じた。

今後も是非このような家庭教育学級講演会を実施してほしい。

おしらせ

講演と音楽のつどい

講師NHKのど自慢　金子辰雄氏
―― 演題・ふれあい人生 ――
のど自慢17年の旅日記より
&
鶴　和美(熊本交響楽団コンサートマスタ)
弦楽四重奏アンサンブルフレイン

・と　き　平成6年3月25日(金)
午後6時30分開演
・ところ　つなぎ文化センター
・入場料　大人1,000円
高校生以下(小学生まで)500円
・主　催　津奈木町・津奈木町教育委員会
・主　管　つなぎ文化センター
・後　援　熊本日日新聞社

劇団 ふるさときゃらばん公演

カントリーミュージカル
「男のロマン　女のフマン」

・と　き　平成6年3月12日(土)
午後6時開場 6時30分開演
・ところ　田浦勤労者体育センター
・入場料　大　人3,500円(当日4,000円)
中高生2,900円(当日3,000円)
・主　催　田浦町青年会
(ふるさときゃらばん実行委員会)

日本列島シボリタテ！男と女の本音と建て前のミュージカルをお楽しみ下さい。
(前売券は、つなぎ文化センターにあります)

津奈木の地名

はじめに

「津奈木町誌下巻」では風土記の分野にも眼を向ける必要があるので、地名や風習を蒐集しておかねばならない。

文字で記録された古文書だけが史料ではなく、地名は地理や歴史を物語る貴重な資料である。長い年月をかけ、多くの人達の口の端にのぼり、納得できるものだけが生き残ってきた。よって、地名が生まれた時代を探ることもできるし、忘れられた事実も明らかにできる。

地名は土地の言葉でしゃべられるから、あとで文字になおされるとヨソ行きの漢字になってしまう。後の世の人が漢字から地名の意味をさぐるようになると、初めの意味と全く別な解釈をされることになりやすい。だから生まれた時のコトバに戻した上で考えることが大事なことである。

次に何処にでも見かける地形には同じ地名がつけられるので、他処にある同地名の所と比較してみることが必要である。

それから、土地台帳にない地名（小字より狭まい所の）を「下げ名」と呼ぶことにして、忘れてしまわれないうちに記録しておかねばなるまい。

これから述べることは筆者のひとり合点の解釈になる心配があるので、識者のご指摘を受けたい。

乱橋（ミダルハシ）

大字津奈木字乱橋は、日野村の大部分を含む倉谷公民館一帯をいう。土地台帳の訓みはミダレハシであるが、地元ではミダルハシが主流である。

県下に同地名が五ヶ所。①竜北町旧吉野村、②松橋町古保山、③津奈木町、④菊池市亘、⑤水俣市越小場。

同公民館横の台地をシロノアト（城の跡）と呼び、古戦場跡だといわれる。①②が加藤対小西、名和対相良の古戦場として記録にあるが、以外の所は戦いがあったかわからない。

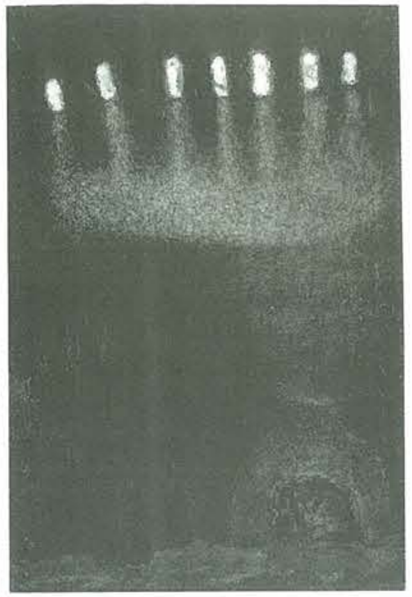
ミダルは地形地名として、川の乱れ流れる所、崩壊地名、「水垂れ」の三つの説がある。

日野村のイガワ（わき水の井戸）を調べてみたところ、坂本熊雄、沢井武市、山本栄喜さん及び村の中心にある観音堂の脇の四ヶ所にあって、飲料水、生活用水が豊富な村であった。

川の乱れ流れる所とは無関係で今まで崖崩れもなかったと地元の人は言う。だとすれば「水垂れ」が最も適切であろう。ハシは端で橋ではないことも地形から言えることである。（岡松記）

油彩「ふるさと」 1980

境野一之作



まだ夜の寒さを残す土間。やっと目を覚ました僕の目に映るのは、忙しく立ち働く祖母の姿。天窓からわずかにもれる朝の光と溶け合いながら立ちのぼるかまどからの湯気、飯の湯気。

かまどのそばには、もう母の姿は無い。もう二度と。

庁舎美術館 (52)

読書感想文

「とべないホタル」をよんで

津奈木小 1年 松田 結夏

ホタルが、にわ先できれいにひかっています。このホタルは、とべるのかな。はねは、だいじょうぶかな。

わたしは、ホタルはみんな空をとんで、きれいなあかりをつけているとおもったけど、きょう、よんだ本の中で、とべないホタルもいるんだなぁということがわかって、とてもかわいそうでした。

とべないホタルさんは、どうして、はねがちぢれてしまったの。みんなといっしょに、空をとべないから、かなしいでしょう。わたしも、あしをけがしてみんなとあそべなかったときは、かなしくてなきましたよ。でも、とべないホタルさんが、人げんにつかまろうとしたとき、なかまのホタルさんが、たすけてくれてよかったですね。かわりにつかまったホタルさんは、ゆう気がありますね。つかまって人げんにつれていかれたけど、そのいえの子どもも、あるけないから、かわいそうでした。ホタルさんを見たあと、その子どもが、ホタルさんをにがしてくれたから、ほんとうによかったです。

わたしは、これまでホタルをみると、すぐつかまえていたけど、こんどから、もうつかまえません。そして、こまっている人がいたら、やさしくしてあげます。そして、ホタルさんたちのように、力をあわせてがんばります。とべないホタルさんも、早くはねがよくなって、とべるといいですね。

学校だより

津奈木小

本校では、一月十日、始業式後PTA主催で、どんどやを実施しました。快晴に恵まれ、多くの会員が参加され、親子共々、和気あいあいのイベントでした。今年も元気で勉強できると思います。

今後の行事は次の通りです。

二月二十日(日)、郡サッカー大会
二月二十日(日)、家庭教育講演会（文化センター、十三時開会）
二月二十六日(土)、持久走大会（BGグランド九時半開会予定）
三月四日(金)、来年度入学児童の一日入学及び学用品販売
三月十一日(金)、お別れ遠足

ここに、こんな人が・・・

六十の手習い 創作の喜びと社会奉仕

服部嘉子さん（桜戸・81）

服部さんは終戦後、海外より引揚げ、やがて津奈木の役場に入り、昭和五十年十月に定年退職されました。

元来花が好きだったので、退職後間もなく水俣で造花の指導が行われているのを知り、自分も勉強したいとその門をたたいた。ところが、お弟子さんに「新人が入ったら指導に支障がでてくる」と云われたそうです。その時のショック、無念さは終生忘れられないと云う。しかし、お弟子さんのこの一言が奮発させ、今日の自分を作り上げたと述懐しておられます。水俣まで歩いて通い続けたと熱っぽく話されたのが印象的でした。

一年後には、国家試験にみごと合格、フラワーデザイナーとしての免許を取得。当時、合格者中の最高齢者であったとのことです。

そして、単なる花造りだけに飽き足らず、創作盆栽に情熱を燃やし、個展開催を目標に努力を積み重ねてこられました。また、社会のご恩に報いるためにと、月二回指導されています。

造花のほか、手芸、編物、クラフト等、すべて手づくりの作品が数多くある。今後は大きな梅の鉢作りに挑戦してみたいと夢をふくらませておられます。是非実現することを期待しております。

作品の前に立つ服部さん

わが町の文化財 石造物(2)

六車茂一郎津奈木村長顕彰碑

六車茂一郎君顕彰碑

蘇峯菅正敬書、建之昭和十一年十二月、高さ三・四〇米、幅〇・八〇米、この碑は六車茂一郎村長の遺徳を忍び、当時の全村民の志により建立されたものである。

学而老布衣謹記に、六車翁明治初頭に生れ、年少大江義塾に学び大蘇峰に師事し夙に大志あり。一朝選ばれて村長の職に就くや恪勤精励治蹟大に興る事正に衆知の如し。翁は特に読書を好んで史に談じ深く政治を愛す是れ蓋し翁の三楽とも云う可きか。常に謂う、「今日の事実は後年の歴史なり」と村間の事蹟ことごとく記帳して剰す所なかりき、また、千城私録、孝女千代、深水玄門先生伝を編纂印行して翁の遺稿、津奈木村郷土誌となる。故翁を欽仰する者喜び何物か之に如かんや願くば今日以後、幾多の千代女、玄門先生が此の地に輩出せん事を冀願す。と記されている。私達現在の町民も翁の遺徳の中で文化の向上に努力べきではなかろうか。

佐々木 緑記

六車茂一郎村長顕彰碑

津奈木散策

松原 昭

草も木もなびき従う五月雨に
君がめぐみは高麗百済まで

この歌は、天正十五年、豊臣秀吉が島津征伐をして、歌坂で休憩している時、深水三河守宗方が秀吉に献上した句である。

津奈木町は、彫刻の町として広く知られているが、この歌にもあるように史跡の多い町でもある。

運動不足解消も兼ねて、山の史跡巡りを計画した。

歌坂駐車場に車を止め、三号線を横断すると、「薩摩街道」の標識があり、歌坂の登り口である。道幅は広く、緩やかな坂道を暫く進むと隧道の上に出た。間もなく雑木林の中に入ると、さすがに道は荒れているが、どうにか頂上に辿り着くことができた。

峠は樹木に覆われ視界がきかないが、往還の盛んな頃には遠くまで展望できたであろう。道路傍には西行の作と伝えられる石佛板碑が祀られているが、永い年月のためか一部が破損している。人の訪れとてあまりないのであろう。下り道は、すぐ藪の中で、道は途絶えている。そのまま進むとダシ道に出た。民家も近い。

薬師堂を右に見ながら進むと浜崎貝塚の前に出た。石神遺跡と共に縄文時代から人々が生活した跡である。

津奈木駅から一気に津奈木太郎へ向かう。往還の入口には、孝女千代を称える墓碑がある。天明六年の建立であり、往来の旅人が目を留めたことであろう。

千代塚を過ぎると、津奈木太郎の坂道となる。暫く歩くと道は別れており、左が街道であるが、雑木に覆われて道は定かでない。

そのまま進むと砂防ダムに出たので、杉林の急坂を登りきると、旧三号線に出た。近くに谷川が流れており、傍らに街道跡が見える。

再び山道に入ると、すぐ石畳が見付かった。上流には二つの石橋も架かっている。谷川の猛威から外れた僅かの石造りである。谷川沿いに杉林の中を進むと、水呑場に着いた。先人も休憩したであろう。水を含むと甘い。傍らには、お地蔵さんが安置され新しい花が飾られていた。さらに、山道を辿る。坂は険しく、道は途切れがちである。

やがて頂上に着いた。峠の茶店や駕籠据所はどの辺りにあったのだろうか。また、旅人は何を思い、この難所を越えたのであろうか。昔の苦労が偲ばれる。湯浦への道は台風による倒木が多くて先へ進めず、散策を終える。

短歌

宮崎 優 選

畑より吾に驚き飛び立ちし雉が夕づく森に高鳴く　寺本ツルヲ

霜おきしすがれし庭にバラ一輪緑葉の中ピンク浮きたつ　福田八重子

ひと夏はすでに終りて色褪せしかがしの帽子畑中に焼く　野田 浦子

霜月を過ぎて体調整いき老二人して畑に甘藷掘る　西 滋子

初春のおみくじ一気に続みほして大吉の札確かとむすべり　白浜美和子

昭和天皇の和歌を吟ずる映像に魅せられて聞くひとすじの道を　柳迫いづも

木枯らしに草みな枯れし山裾に群がり咲けるつわぶきの花　鳥井 保

北風にシベリヤの戦友寒からん墓標は小さき白樺の枝　宮崎 優

肥後狂句

伸び盛り、今がからだのきたえどき
腕だめし、選手のかべは厚かった　雲波

伸び盛り、何杯食えば気が済むと
腕だめし、まずこの台でためし打ち　神無月

伸び盛り、ズボンの丈が追いつかん
腕だめし、もちっとよか球投げてくれ　万葉

伸び盛り、鍋いっぱいを平らげた
腕だめし、まだまだ拾てたもんぢゃなか　七本松

（次笠）命がけ、お金持
一笠二句づつ　四月十二日までつなぎ文化センターへ。